早稲田大学 2016年度
一般入試 文化構想学部

国語

（問題）

2016年度

〈2016 H28102023〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	○悪い	◎悪い
マークを消す時	○良い	○悪い	◎悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

（1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

（2）所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。

（3）受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本									
0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

（4）受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

（例）
3825番
⇩

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。

8 終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。

9 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

（一）次のA・Bの文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、AにはBに言及するくだりがある。

A

『孤独なる群衆』の著者として知られるD・リースマンはコミュニケイション史の観点から文化の発展段階を三つに分けている。第一には口話コミュニケイションに依存する文化、第二は印刷された文字のコミュニケイションに依存する文化、すなわち活字文化、第三はラジオ・映画・テレビ等の視聴覚的メディアに依存するいわゆる大衆文化である。リースマンの問題意識は活字文化によって形成された内的志向型の人間にかわって、映画・テレビ等の映像文化によって鋳出された他人志向型の人間が登場する過程の追求にその焦点が合わされているのであるが、さしあたりここでとり上げたいのは、彼が第一と第二の過渡期、[1]活字が口話コミュニケイションを複製する手段として併用されていた時代を考えているということである。

リースマンはピューリタニズムとの関連において黙読の習慣の成立を把えようとする。印刷術の発明された十五世紀から、ピューリタニズムのもとに個人的、内面的な読書の方式が一般化する十八世紀までは、活字文化の前期ないしは準備期として規定されるのである。「じつにグーテンベルクが出た後でさえ、現代の読書の方式が一般化するまでには長い時を要した。書物は独りで読まれる時ですら、声をあげて朗読された。そのことは文字が発音通りに自分勝手に綴られた（ジョンソン博士の辞書が正字法を統一するまでは）ことにも示されている。印刷された行をなめに、頭を梭（ひ）のように素早く動かしながら、黙ったままで脚光を浴びない内密な読み方をすることを学んだのは――これはいかにも彼等然としている――清教徒（ピューリタン）である。このように比較的時代がくだってから始めて印刷された書物が外への扉と同じく内への扉を開いたのであり、他人の存在という喧騒から孤独へと人を誘ったのである。」黙読によって書物が享受される時代に、音読の習慣が卓越する時代が先行することは、リースマンのような社会学者ばかりでなく、読者層の問題に関心を寄せる文学史家の側からも指摘されている。たとえばイギリスのばあい、エリザベス時代には、詩はもちろん、散文でさえ朗読による実演を顧慮して書かれたのであり、活字の機能を完全に駆使した文学のスタイル――散文の小説は、十八世紀初頭ジャーナリズムの発生とともに漸くその姿を現わすのである。一方、十七世紀には読書といえば、それは殆ど例外なく声に出して読むことを意味していた（句読点の切り方は構文ではなく、発声にもとづいていた）。またドイツのばあい、父親や母親が、子供達に本を朗読して聞かせている場面は、市民の家庭風景を描いた十八世紀の通俗画が好んで取扱う画題のひとつであったという。

日本のばあい、活版印刷術の移入に先立つ木版整版印刷の期間が、ほぼこの音読の時代に対比しうると考える。そして活版印刷と木版印刷との交替期にあたる明治初年は、リースマンのいう口話コミュニケイションの段階から活字コミュニケイションの段階への過渡期、それもその最終期であったと規定されよう。印刷された文字は自律的な媒体としての機能を充分に発揮しえず、口話コミュニケイションの複製ないしは再現の手段としての役割をなお兼帯していた時代なのである。このことは、いいかえるならば、活字が個人的なコミュニケイション様式として作用する一方、家族共同体・地域共同体・精神的共同体等、集団を単位とするコミュニケイション様式として作用する場合も少なくなかったことを意味している。家族共同体における戯作小説や小新聞、地域共同体における新聞解話会、精神的共同体における政治小説は、それぞれこの集団的・共同的な享受方式のあり方を典型的に示しているものであろう。

この音読から黙読へという享受方式の移行過程を、同時代人のひとりとして、大まかながらかなり正当に認識していたのは坪内逍遙である。明治二十四年四月「国民之友」誌上に掲載された「読法を興さんとする趣意」はいわば逍遙の文学的経歴の曲り角――小説改良から演劇改良へ――で書かれた論文であるが、ここで注目したいのはその文学享受の理論としての性格である。

逍遙はこの論文の冒頭で、上古の時代は印刷術も無く用紙も乏しく著作の流布に困難をきわめたために「朗誦朗読の必要」が起こったと述べ、ホーマーやヘロドトスの名を挙げつつ「節奏文」（韻文）が「無調の文章」（散文）に先立って現われたのは、この朗読という発表形式と関連していると説明する。続いて逍遙は自問自答の形式をかりて論をすすめながら、現代は上古とは異なり、教育が普及し、印刷術が発達した結果、「一篇の文章の忽ち化して数万の印刷物となり同時に億万人に黙読せらるる世」になったとし、「昔人こそ耳をもて他人の作を読みもしたりけめ今人は目もて読み得べき便宜を得」ている以上、学習の方法、あるいは他人への伝達の手段として理解されていた従来の朗読法が、無意義なものに化しつつあることを指摘する。ここで逍遙は「人性研究法」の一端に応用しうる新しい読書術＝「論理的読法」を提唱するのである。その原則は「文章の深意を穿鑿し（批評（クリチシズム））否むしろ其文の作者若くは（院本ならば）其人物（カラクタル）の性情を看破し（解釈（インタルプリテーション））自家みづからが其作者若くは其人物に成代りたる心持」で読むことにあり、それは音読の際はともかく「［　I　］」からざる原則なのであった。この原則の上に立って表現過程に重きをおくものが「美読法」である。それは黙読による享受方式が支配的になる大勢を前提に、今まで習慣化していた享受方式である朗読を一旦否定し、あらためてそれを演劇的表現につながる朗読法として再生させたものなのである。したがって、それは「原作者の本意をして朗読の間に活動せしめ」るものでなければならず、「文の情と相応相伴して緩急の句読（pause）に注意し声の抑揚、高低、弛張（emphasis）に注意し哀傷、奮激等の情を其声の色にあらはさんとする心得」を必要とする（「美読法」を適用しうる文章として逍遙は言文一致の文章と「傑作」の脚本をあげている）。形式から入って内容に到達する「素読」とはまさに逆の行き方なのである。

この「論理的読法」は文章の形式美の翫味よりも、形象の把握に力点を置いているかぎりで、正当な散文享受の姿勢を読者に示唆しているものといえよう。また作者ないし作中人物に同化して、その思想・感情を追体験する「論理的読法」に堪えうる文学作品は、[2]当然のこととして、作者の強靭な自己表現の意欲に貫かれた厳しい性格造型が要請されなければならない。逍遙は期せずして「近代」の小説読者の享受態勢を規定していたわけである。

（前田愛『近代読者の成立』による）

B

予が謂ふ論理的読法は、欧米に謂ふ「エロキューション」より脱化したるものなり。必ずしも朗読の際に此法を用う可しとは言はず、黙読の際には必ず用ゐざる可からずといふなり。悉しくいへば、我論理的読法は、彼の文法的読法の如く朗読法の本領にはあらずと雖も、百般の読法の本領なり。ヘブン嘗て「エロキューション」を釈して曰く、「エロキューションとは自作若くは他人の作を、他を感動せしむるやうに言ひあらはし若くは演説する法なり」と。又ホエートリーは論理的読法のことを感銘的読法と名づけ、文意を明瞭に有力に面白く朗読するものなりと弁じ、其正読法（文法的読法）に優る所以は文の情と文の体とに応じて読者に若干の応変あるに因る云々と論じたり。予の謂ふ論理的（批評的）読法は、上の定義とは要点に小異あり。予は或エロキューショニストの謂ふ美読法（fine reading）を興さんとするなり。美読法とは、啻に文義をして明瞭ならしめ（文法的読法）、有力にし面白くするに止まらずして、其文自作ならば自家の感情を朗読の間に活動せしめ、若し又他人の文ならば其原作者の本意をして朗読の間に活動せしめ、若し又院本中なる人物の台辞ならば其人物の性情をして朗読の間に躍如たらしめんと欲するものなり。更に具に之をいへば、凡そ一文章を読まんとするに当りては、先づ其発音を分明にして、彼の北奥の人の如くスとシとを誤ることなからしめ、又東京の市人の如くヒとシとを誤ることなからしめ、又音訓の別を正しうするなどはいふも更也。勿論文の品、質、体、格にも注意して、例へば、朝廷、宗廟、聖賢を叙記したる文を読む時は a 読み、山河、軍旅を叙記したるには b 読み、山林、仙隠を叙記したるには c 、宴楽、歓娯、通達を叙記したるには d 、神怪、豪侠、幽隠を叙記したるには e 、攬古、搜玄、雅勝を叙記したるにはいと f 読むなど、若くは文の情悲壮なれば読む声も悲壮に、文の情優美ならば読む声も優美に、文の情急なれば読む声も急に、文の情緩なれば読む声も緩に、情断々たれば声もまた断々、情嗚咽すれば声もまた嗚咽し、情怒号すれば声もまた怒号するやうに、及ぶべき限りは文の情と相応相伴して緩急の句読（pause）に注意し、声の抑揚、高低、弛張（emphasis）に注意し、哀傷、奮激等の情を其声の色にあらはさんとする心得あるべし。饗庭篁村氏が「物語ものを読まんには、静かに優しく声づくろひして、我も冠装束したる心あるべし。亦戦記ものを読まんには、声も強く張り勇ましく、其身も六具にかためたる心ならねば興味無し」といはれつるは、此理をみやびやかに言はれたるに外ならず。されば、或は此法を名づけて活読法といはんも不可なからん。何となれば、彼の機械的読法の死読法たるに対して其然るべき所以明かなれば也。

論理的読法の機械的部門に関しては、欧米の学者中、仔細煩瑣なる法則を設けて子弟に教授せんと試みたるもの多くあり。併しながら予は強ちに論理的読法をもて朗読の科学的方法とは信ぜざるが故に、彼のホエートリーと共に此等細則の益なくして徒らに煩瑣なるを排するものなり。又批評的（論理的）読法の細則は蓋し以心伝心にして自得自証せざる可からざるものと信ずるが故に、敢て実例を挙げて細則を説かず。偏に其法の精神的部門に関する最も大切なる（即ち黙読の際とても行はざる可からざる）概則をいはゞ、凡そ論理的読法にては彼の文法的読法に於ての如くに強ち文法的句読に拘泥せずして、専ら其文章の深意を穿鑿し（批評）、否むしろ其文の作者若くは（院本ならば）其人物の性情を看破し（解釈）、自家みづからが其作者若くは其人物に成代りたる心持にて其文中に見えたる性情をもて直ちに自家の性情の如くにし、誠実に熱心に肺肝を傾けて、慷慨せるが如く、悲憤せるが如く、哀傷せるが如く、憤怒せるが如くに読まんとするなり。言葉を改めていへば、彼の機械的読法に於ての如く単に目のみをもて読まず、又彼の文法的読法に於ての如く専ら智力のみをもて読まずして、智と情と目と心と相助け相裨けて読まんとするなり。更に総括して状せんには、怒るべき文句には怒りて読み、笑ふべき文句には笑うて読み、急ぐべき時には急いて読み、沈むべき時には沈みて読み、総て「云々ならば云々なるべし」といふ論理に従ひて読むが故に、名づけて論理的読法といふなり。或は之を目して性情的読法といふも妨げなからん。人物の性情に相応じて読めばなり。

（坪内逍遙「読法を興さんとする趣意」による）

注

ヘブン……ヘボン式ローマ字の創始者ヘボン。一八一五～一九一一。
ホエートリー……イギリスの論理学者。一七八七～一八六三。
院本……台本。
北奥……東北地方。
饗庭篁村……明治期の小説家、演劇評論家。一八五五～一九二二。

問一 Aの文章中の傍線部1「活字が口話コミュニケイションを複製する手段として併用されていた時代」と同義の表現として適切でないものを、次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 黙読によって書物が享受される時代
ロ 音読から黙読へという享受方式の移行過程の時代
ハ 木版整版印刷を介して活版印刷と木版印刷が交替する時代
ニ 書物は独りで読まれる時ですら、声をあげて朗読された時代
ホ 印刷された文字が自律的な媒体としての機能を充分に発揮しえない時代

問二　Aの文章中の空欄 Ⅰ はBの文章からの引用である。ここに入る最も適切な部分を、Bの文章の第一段落中から十字以上十五字以内で抜き出し、その最初の三字と最後の三字を記述解答用紙の所定の欄に記入せよ（句読点等が含まれる場合は、それも一字として数える）。

問三　Aの文章中の傍線部2「「近代」の小説読者の享受態勢を規定していた」とは、どのように規定していたと考えられるか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　黙読しても鑑賞に堪えうる言語表現の美しさを、書き手に要求すること
ロ　読み聞かせる他者を排除し、読書行為に近代的個の観念を確立すること
ハ　作品を深く理解して、聞き手を感動させる巧みな朗読技術を用いること
ニ　書かれた作品の精神性に向き合い、内省的にそれを理解し享受すること
ホ　一人で黙読する際にも心の中で音読して、作品内容の理解を深めること

問四　Bの文章中の傍線部3「要点に小異あり」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　文義を正しく分析し、従来の朗読術よりも科学的な理論に基づいた法則を確立することが重要である。
ロ　欧米の朗読術は日本の風土に合わないので、日本語の特徴を理解し発音を正すことが重要である。
ハ　文義を明瞭にして面白く読むだけでなく、内容の情感を十分に汲み取った読み方が重要である。
ニ　文法的に正確に作品を分析するよりも、まず読み手が作品そのものを愛することが重要である。
ホ　欧米で確立された朗読術にこだわらず、その時々で自らの好むまま自由に朗読することが重要である。

問五　Bの文章中の空欄 a ～ f に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　a　粛如として　b　勇壮に　c　清く　d　和かに　e　ものすごげに　f　寂びて
ロ　a　厳めしく　b　みやびやかに　c　粛如として　d　寂びて　e　清く　f　ものすごげに
ハ　a　おごそかに　b　寂びて　c　清く　d　みやびやかに　e　和かに　f　勇壮に
ニ　a　優美に　b　清く　c　和かに　d　ものすごげに　e　勇壮に　f　寂びて
ホ　a　勇壮に　b　和かに　c　粛如として　d　清く　e　寂びて　f　みやびやかに

問六　Bの文章中の傍線部4「自家みづからが其作者若くは其人物に成代りたる心持にて其文中に見えたる性情をもて直ちに自家の性情の如くに」する「美読法」の原則について、これに相当する表現行為を言い表すものとして、最も適切な漢字二字をAの文章中から抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問七　Aの文章とBの文章の音読と黙読に対する考え方について述べたものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　Bの文章では作品受容としての黙読と表現法としての朗読が一対のものとして考えられているが、Aの文章はあくまで前近代から近代へと活字の享受方式が変化する過程の現象として、Bの文章が主張する「論理的読法」は読書方法の移行期における副次的な産物だとみなしている。

ロ　Bの文章では、黙読と朗読の両者を併用する「論理的読法」が文学理解に効果的であるとしているが、Aの文章は、近代の黙読では読者が自分さえ作品を理解できればよいので、人に聴かせるための発音や句読の法則は不必要であるから、音読は文学を享受する役には立たないと否定している。

ハ　Bの文章では、黙読よりも人に聴かせる朗読を重要視し、感動的な朗読をするための手段として黙読による内容理解を挙げているが、Aの文章はあくまで音読は前近代的で未発達な読書方法に過ぎないものと考えており、Bの文章が勧める朗読法は、黙読の普及に逆行するものと捉えている。

ニ　Bの文章では、「性情的読法」、「活読法」、「美読法」という言葉が挙げられているが、これらの概念は違うものであるのに、Aの文章では前近代的な音読と近代的な黙読の対比のみに注目して「論理的読法」と「美読法」に言及しており、Bの文章における「読法」の違いが無視されている。

ホ　Bの文章では、「読法」として作品を理解することから黙読を重視し、それを踏まえて人に聴かせる朗読の表現方法も考えているが、Aの文章はあくまで前近代的な音読から近代的な黙読への読書方法の変化に着目して、Bの文章が主張する黙読の姿勢に近代的文学受容の現象を見出している。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ヒョウタンの原産地はアフリカ西部のニジェール川流域、あるいは東部のケニアからタンザニアの大地溝帯のあたりと言われている。いずれにせよもともと日本に野生種はなかったとされていて、もしそれが正しければ、貝塚のヒョウタンは栽培されていたということを意味している。少なくとも八五〇〇年前頃に縄文人がヒョウタンを栽培していたとすれば、それ以前にどこかからヒョウタンの種が上陸していなければならない。いつ誰がヒョウタンの種を日本列島に持ち込んだのだろうか。また底の部分は土器といっしょに出土したが、どのような用途で使われていたのか。

この問いはそのままヒョウタンの起源につながる。小さな実はいったいどうやって陸と海のあいだを移動したのだろう。ヒョウタンは遥かな旅へとわたしたちを連れ出すのだ。

イ

ここで太平洋の反対側アメリカ大陸に視点を移してみよう。新大陸でも元来野生のヒョウタンはなかったとされ、アフリカ大陸から渡来したと言われている。植物学者にとっては永遠の謎である。これまでヒョウタンが海流や鳥などによって自然に運ばれ漂着したとする説と、人間が持ち込んだとする説が議論されてきた。後者の場合はコロンブスによる新大陸発見以前に人的な交流があったのか、それとも一四九二年以降に人間が持ち込んだのかということになる。

ロ

この問題を執拗に追及した米国人にドナルド・レイスラプという考古学者がいる。彼は新大陸の遺跡を調べ、インカ帝国以前の古代文明はメキシコでもペルーでもヒョウタンを栽培していたという説をとなえて注目された。レイスラプの根拠のひとつは南米ペルーにある古代遺跡、チャビン・デ・ワンタルの石碑である。チャビン文化は紀元前一五〇〇年から二〇〇年頃に栄えた、インカ帝国以前の古代文化として知られている。チャビン・デ・ワンタルの遺跡からは、複雑なレリーフを施した石碑が多数発見されているが、それらの中にヒョウタンの花や実を表しているように見えるものがある。もちろん写実的なデッサンではない。紋様の一部として図案化し、それが石に刻まれているのである。いずれにせよ、もしレイスラプが正しければ、それはヒョウタンを描いた最古の絵ということになるだろう。

ハ

だがレイスラプはそれがインカ帝国以前の南米原産種と考えているわけではない。彼は少なくとも一〇〇〇〇年前にはアフリカ大陸からブラジル北東岸やペルーの太平洋岸、あるいはメキシコ湾岸に伝えられた可能性を示唆している。現在でも西アフリカでは、ヒョウタンは漁撈用の浮きに使われている。もし海洋民が大西洋を渡ってきたとすれば、飲料用容器だけでなく、浮き用のヒョウタンを携えていたのではないか。ただし、アフリカでもヒョウタンが栽培植物だったと仮定しての話である。もしかすると、ヒョウタンを人間が栽培してきた歴史は、アメリカ、アジアのほうが先で、そこからあらためて東アフリカで栽培が始まった可能性もある。

ニ

たとえばアマゾン河流域で進められている発掘調査では、少なくとも七五〇〇～八五〇〇年前頃にはヒョウタンが栽培されていたことが確かめられている。「原生林」あるいは「処女林」と呼ばれてきたアマゾン河だが、ヒョウタンなどの栽培植物や大量の土器の発見によって、ジャングルは一〇〇〇〇年近くの年月をかけて人間が共生してきた、世界最大の「Ⅰ」であった可能性も出てきている。およそ似ても似つかない若狭湾の湖水地方と南米のジャングルとは、実はヒョウタンを共通の道具として営まれていた、最初の森の文明だったのかもしれないのである。

人間が伝えたとする説に対して、ヒョウタンは自然に海流に乗って漂着していたとする説も根強い。たとえばヒョウタンの種は非常にタイセイ[1]が強く、三〇〇日以上海水に漬けた後にも発芽するという。アフリカ西岸から海流に乗りブラジル東岸に流れ着いた後、海岸近くで発芽し自生していた可能性は十分にあるというのだ。

ホ

確かめようがないようにも思えるが、栽培説と漂着説のあいだには「野生」の概念を巡る、重要な論点がひそんでいる。持論への批判にたいしてレイスラプは、もし野生のヒョウタンが存在していたのなら、なぜ新大陸に人間が住むようになって急激に野生種は消滅したのだろうかと鋭い問いを投げかけている。なぜ古いヒョウタンの痕跡は、人間の居住地跡の周辺から発見されるのか。あたかも人間が住んだとたんに、ヒョウタンが栽培されたかのように見えるからである。

レイスラプの指摘で面白いのは、人間が居住地域での栽培活動を止め、荒地になったとたんにヒョウタンも姿を消しているという点である。またヒョウタンは洪水や土砂崩れ、地震や野火などの自然現象によって土が掘り返され、土壌が急変した地域によく順応するという。人間の介入が途絶えたところで「Ⅱ」という点と、自然の介入によって「Ⅲ」という両方の指摘は、一見して矛盾するようだが、植物の側に視点を置けばそうではない。自然によってであれ、人間によってであれ、土地に外的な力が加わるところにヒョウタンは向いている。

ここまで来ると、ヒョウタンの「Ⅳ」にレイスラプがなぜこだわったのかがわかるだろう。ヒョウタンが最古の栽培植物のひとつだということは確かだが、それ以上にヒョウタンは他の植物を栽培するための、基本植物だったのではないかということである。レイスラプはそれを、他の栽培植物のための「子宮」と表現し、「ヒョウタン母さん」と呼んだ。ヒョウタンは野生と文化の境界にあり、人間に栽培することを「促す」。人間が自然に一方的に働きかけたのではなく、自然のほうが人間に「栽培してみたらどうですか」、と囁(ささや)いたようなものだろうか。それがヒョウタンだとしたら、確かに母なる実ということになる。すこしシテキ[2]にすぎるような気もするが、単なる比喩にとどまるものではないのである。

(港千尋『ヒョウタン美術館』による)

問八 次の文は、本文中に入るべきものである。 イ ～ ホ から最も適切な箇所を一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

そこから人間が到来する以前に、新大陸にも野生ヒョウタンが存在したとする説が出て来る。

問九 空欄 Ⅰ に入る語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 里山　ロ 古墳　ハ 耕作地　ニ 文明地　ホ 放牧地　ヘ 未開拓地

問十 空欄 Ⅱ ・ Ⅲ に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ Ⅱ 育つ　Ⅲ 消える　ロ Ⅱ 育つ　Ⅲ 生まれる　ハ Ⅱ 消える　Ⅲ 育つ
ニ Ⅱ 消える　Ⅲ 生まれる　ホ Ⅱ 生まれる　Ⅲ 育つ　ヘ Ⅱ 生まれる　Ⅲ 消える

問十一 どうして傍線部Aのように「鋭い問いを投げかけている」と言えるのか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ この問いが、ヒョウタンの新大陸への移入説を否定することを示唆しているから。
ロ この問いが、ヒョウタンの新大陸への漂着説を否定することを示唆しているから。
ハ この問いが、ヒョウタンの新大陸での原産説を否定することを示唆しているから。
ニ この問いが、ヒョウタンの新大陸での栽培説を否定することを示唆しているから。

問十二 空欄 Ⅳ に入る語句として、最も適切なものを本文中から二字で抜き出して記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問十三 本文の論旨に最も合致するものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ レイスラブは、最古の植物であると共にその原産地が最古の文明発生地だと推測できるから、何よりもヒョウタンに着目した。
ロ 日本の縄文人とインカ帝国以前の古代文明にヒョウタンの使用が認められることから、その原産地について示唆が得られる。
ハ アマゾン河流域での発掘調査によりヒョウタンが栽培されていたことが確認され、最初の文明の発生地について推測できる。
ニ その地域でのヒョウタンの栽培説と漂着説について確定できなくても、そこに野生の概念の考察に関する示唆が認められる。

問十四 傍線部1・2のカタカナの部分を漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ（漢字は楷書で丁寧に書くこと）。

（三）次の甲A～C・乙・丙の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

甲A［次の文章は、芥川龍之介『歯車』の一節である。］

僕は丸善の二階の書棚にストリントベルグの「伝説」を見つけ、二三頁ずつ目を通した。それは僕の経験と大差のないことを書いたものだった。のみならず黄いろい表紙をしていた。僕は「伝説」を書棚へ戻し、今度は殆ど手当り次第に厚い本を一冊引きずり出した。しかしこの本も挿し画の一枚に僕等人間と変りのない、目鼻のある歯車ばかり並べていた（それは或独逸人の集めた精神病者の画集だった）。僕はいつか憂鬱の中に反抗的精神の起るのを感じ、やぶれかぶれになった賭博狂のようにいろいろの本を開いて行った。が、なぜかどの本も必ず文章か挿し画かの中に多少の針を隠していた。どの本も？――僕は何度も読み返した「マダム・ボヴァリイ」を手にとった時さえ、畢竟僕自身も中産階級のムッシウ・ボヴァリイに外ならないのを感じた。……

日の暮に近い丸善の二階には僕の外に客もないらしかった。僕は電燈の光の中に書棚の間をさまよって行った。それから「宗教」と云う札を掲げた書棚の前に足を休め、緑いろの表紙をした一冊の本へ目を通した。この本は目次の第何章かに「恐しい四つの敵、――疑惑、恐怖、驕慢、官能的欲望」と云う言葉を並べていた。僕はこう云う言葉を見るが早いか、一層 Ⅰ 精神の起るのを感じた。それ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかった。が、 Ⅱ 精神もやはり Ⅲ 精神のようにやはり僕を不幸にするのはいよいよ僕にはたまらなかった。僕はこの本を手にしたまま、ふといつかペン・ネエムに用いた「寿陵余子」と云う言葉を思い出した。それは邯鄲の歩みを学ばないうちに寿陵の歩みを忘れてしまい、蛇行匍匐して帰郷したと云う「韓非子」中の青年だった。今日の僕は誰の目にも「寿陵余子」であるのに違いなかった。しかしまだ地獄へ堕ちなかった僕もこのペン・ネエムを用いていたことは、――僕は大きい書棚を後ろに努めて妄想を払うようにし、丁度僕の向うにあったポスタアの展覧室へはいって行った。が、そこにも一枚のポスタアの中には聖ジョオジらしい騎士が一人翼のある龍を刺し殺していた。しかもその騎士は兜の下に僕の敵の一人に近いしかめ面を半ば露していた。僕は又a「韓非子」の中の屠龍の技の話を思い出し、展覧室へ通りぬけずに幅の広い階段を下って行った。

僕はもう夜になった日本橋通りを歩きながら、屠龍と云う言葉を考えつづけた。それは又僕の持っている硯の銘にも違いなかった。この硯を僕に贈ったのは或若い事業家だった。彼はいろいろの事業に失敗した揚句、とうとう去年の暮に破産してしまった。僕は高い空を見上げ、無数の星の光の中にどのくらいこの地球の小さいかと云うことを、――従ってどのくらい僕自身の小さいかと云うことを考えようとした。しかし昼間は晴れていた空もいつかもうすっかり曇っていた。僕は突然何ものかの僕に敵意を持っているのを感じ、電車線路の向うにある或カッフェへ避難することにした。

それは「避難」に違いなかった。僕はこのカッフェの薔薇色の壁に何か平和に近いものを感じ、一番奥のテエブルの前にやっと楽々と腰をおろした。そこには幸い僕の外に二三人の客のあるだけだった。僕は一杯のココアを啜り、ふだんのように巻煙草をふかし出した。巻煙草の煙は薔薇色の壁へかすかに青い煙を立ちのぼらせて行った。この優しい色の調和もやはり僕には愉快だった。けれども僕は暫らくの後、僕の左の壁にかけたナポレオンの肖像画を見つけ、そろそろ又不安を感じ出した。ナポレオンはまだ学生だった時、彼の地理のノオト・ブックの最後に「セエント・ヘレナ、小さい島」と記していた。それは或は僕等の言うように偶然だったかも知れなかった。しかしナポレオン自身にさえ恐怖を呼び起したのは確かだった。……

僕はナポレオンを見つめたまま、僕自身の作品を考え出した。するとまず記憶に浮かんだのは「侏儒の言葉」の中のアフォリズムだった（殊にb「人生は地獄よりも地獄的である」と云う言葉だった）。それからc「地獄変」の主人公、――良秀と云う画師の運命だった。それから……僕は巻煙草をふかしながら、こう云う記憶から逃れる為にこのカッフェの中を眺めまわした。2僕のここへ避難したのは五分もたたない前のことだった。しかしこのカッフェは短時間の間にすっかり容子を改めていた。就中僕を不快にしたのはマホガニイまがいの椅子やテエブルの少しもあたりの薔薇色の壁と調和を保っていないことだった。僕はもう一度人目に見えない苦しみの中に落ちこむのを恐れ、銀貨を一枚投げ出すが早いか、匆々このカッフェを出ようとした。

「もし、もし、二十銭頂きますが、……」

僕の投げ出したのは銅貨だった。

注

丸善……東京の日本橋にある、洋書を取り扱う老舗書店。
ストリントベルグ……スウェーデンの劇作家・小説家。
マダム・ボヴァリイ……フランスの小説家フローベールの長編小説。
韓非子……中国の戦国時代の思想書。芥川龍之介は、ここで二つの話を『韓非子』のものとしているが、実はともに『荘子』が典拠である。
聖ジョオジ……古代ローマの伝説的勇士。ドラゴン退治の騎士として絵画の題材となった。
銀貨……当時流通していた、五十銭銀貨。

甲B［次の文章は、**甲A**波線部**b**のもととなった、芥川龍之介『侏儒の言葉』「地獄」の全文である。］

人生は地獄よりも地獄的である。地獄の与える苦しみは一定の法則を破ったことはない。たとえば餓鬼道の苦しみは目前の飯を食おうとすれば飯の上に火の燃えるたぐいである。しかし人生の与える苦しみは不幸にもそれほど単純ではない。目前の飯を食おうとすれば、火の燃えることもあると同時に、又存外楽楽と食い得ることもあるのである。のみならず楽楽と食い得た後さえ、腸加太児の起ることもあると同時に、又存外楽楽と消化し得ることもあるのである。こう云う無法則の世界に順応するのは何びとにも容易に出来るものではない。もし地獄に堕ちたとすれば、わたしは必ず咄嗟の間に餓鬼道の飯も掠め得るであろう。況や針の山や血の池などは二三年其処に住み慣れさえすれば格別跋渉の苦しみを感じないようになってしまう筈である。

注　腸加太児……炎症を伴う腸の病気。

甲C［次の文章は、**甲A**波線部**c**が踏まえている、芥川龍之介『地獄変』の末尾の部分である。］

その夜雪解の御所で、大殿様が車を御焼きになった事は、誰の口からともなく世上へ洩れましたが、それに就いては随分いろいろな批判を致すものもおったようでございます。先第一に何故大殿様が良秀の娘を御焼き殺しなすったか、――これは、かなわぬ恋の恨みからなすったのだと云う噂が、一番多うございました。が、大殿様の思召しは、全く車を焼き人を殺してまでも、屏風の画を描こうとする絵師根性の曲なのを懲らす御心算だったのに相違ございません。現に私は、大殿様が御口ずからそう仰有るのを伺った事さえございます。

それからあの良秀が、目前で娘を焼き殺されながら、それでも屏風の画を描きたいと云うその木石のような心もちが、やはり何かとあげつらわれたようでございます。中にはあの男を罵って、画の為には親子の情愛も忘れてしまう、人面獣心の曲者だなどと申すものもございました。あの横川の僧都様などは、こう云う考えに味方をなすった御一人で、「如何に一芸一能に秀でようとも、人として五常を弁えねば、地獄に堕ちる外はない」などと、よく仰有ったものでございます。

ところがその後一月ばかり経って、いよいよ地獄変の屏風が出来上りますと良秀は早速それを御邸へ持って出て、恭しく大殿様の御覧に供えました。丁度その時は僧都様も御居合わせになりましたが、屏風の画を一目御覧になりますと、流石にあの一帖の天地に吹き荒んでいる火の嵐の恐しさに御驚きなすったのでございましょう。それまでは苦い顔をなさりながら、良秀の方をじろじろ睨めつけていらしったのが、思わず知らず膝を打って、「出かしおった」と仰有いました。この言を御聞になって、大殿様が苦笑なすった時の御容子も、未だに私は忘れません。

それ以来あの男を悪く云うものは、少くとも御邸の中だけでは、殆ど一人もいなくなりました。誰でもあの屏風を見るものは、如何に日頃良秀を憎く思っているにせよ、不思議に厳かな心もちに打たれて、炎熱地獄の大苦艱を如実に感じるからでもございましょうか。

しかしそうなった時分には、良秀はもうこの世に無い人の数にはいっておりました。それも屏風の出来上った次の夜に、自分の部屋の梁へ縄をかけて、縊れ死んだのでございます。一人娘を先立てたあの男は、恐らく安閑として生きながらえるのに堪えなかったのでございましょう。屍骸は今でもあの男の家の跡に埋まっております。尤も小さな標の石は、その後何十年かの雨風に曝されて、とうの昔誰の墓とも知れないように、苔蒸しているにちがいございません。

乙［次の文章は、**甲C**芥川龍之介『地獄変』のもととなった、『宇治拾遺物語』該当説話の全文である。］

これも今は昔、絵仏師良秀といふありけり。家の隣より、火出できて、風おしおほひてせめければ、逃げ出でて、大路へ出でにけり。人の書かする仏もおはしけり。また衣着ぬ妻子なども、さながら内にありけり。それも知らず、ただ逃げ出でたるをことにして、向かひのつらに立てり。

見れば、すでに我が家に移りて、煙、炎くゆりけるまで、大かた向かひのつらに立ちて、ながめければ、「あさましきこと」とて、人ども、来とぶらひけれど、さわがず。「いかに」と人いひければ、向かひに立ちて、家の焼くるを見て、うちうなづきて、時々わらひけり。「あはれ、しつるせうとくかな。年ごろはわろく書きける物かな」といふ時に、とぶらひに来たる者ども、「こはいかに、かくては立ち給へるぞ。あさましきことかな。物のつき給へるか」といひければ、「なんでふ、物のつくべきぞ。年ごろ、不動尊の火炎をあしく書きけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれと、心得つるなり。これこそ、せうとくよ。この道をたてて、世にあらんには、仏だによく書きたてまつらば、百千の家も、出で来なん。わたうたちこそ、させる能もおはせねば、物をも惜しみ給へ」といひて、あざわらひてこそ立てりけれ。

その後にや、良秀がよぢり不動とて、今に人々めであへり。

注　せうとく……所得。利益のこと。
　　わたうたち……お前たち。

丙［次の文章は、甲A波線部a「屠龍」説話の出典である『荘子』列禦寇篇の一節である。文中には、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。］

荘子曰、知道易、勿言難。知而不言、所以之天也。知而言之、所以之人也。古之人天而不人。朱泙漫学屠龍於支離益、単千金之家。三年技成、而無所用其Ⅳ。聖人以必不必、故無兵。衆人以不必必之、故多兵。順於兵、故行有求。兵恃之、則亡。

注　朱泙漫……人名。
　　支離益……人名。

問十五　甲Aの文章における空欄Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに入る語句の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　Ⅰ　伝統的　Ⅱ　近代的　Ⅲ　反抗的
ロ　Ⅰ　伝統的　Ⅱ　反抗的　Ⅲ　近代的
ハ　Ⅰ　近代的　Ⅱ　伝統的　Ⅲ　反抗的
ニ　Ⅰ　近代的　Ⅱ　反抗的　Ⅲ　伝統的
ホ　Ⅰ　反抗的　Ⅱ　伝統的　Ⅲ　近代的
ヘ　Ⅰ　反抗的　Ⅱ　近代的　Ⅲ　伝統的

問十六　甲Aの文章における傍線部1に、「まだ地獄へ堕ちなかった僕もこのペン・ネエムを用いていた」と記す背景に、筆者のどのような考えがあったのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　書棚にあった目鼻のある歯車の画集にはさまっていた針に指を傷つけられたことと、「韓非子」の青年の愚かさを重ね合わせた。
ロ　憂鬱の中に反抗的精神を呼び覚まされた際、中国故事の邯鄲一炊の夢のような白昼夢を見たと感じ、陶然とした気持ちになった。
ハ　「宗教」の札を掲げた書棚にある本に、「恐ろしい四つの敵」とあるのを見て、現在の自分が地獄に堕ちているかのように感じた。
ニ　歩みを忘れて蛇行匍匐して帰郷した青年と自分を重ね合わせたペン・ネエムだが、そこに龍を殺すという真意を発見して驚いた。
ホ　現在の地獄のような状況を伝統的精神で解決しようとしたが、近代的精神に邪魔されて、かえって不幸になってしまうと感じた。
ヘ　若いころには、さして深い考えもなく用いたペン・ネエムが、のちの自らの運命を予言していたかのように感じて、慄然とした。

問十七　甲Aの文章における傍線部2に、「このカッフェは短時間の間にすっかり容子を改めていた」とあるが、それはどうしてか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　ナポレオンが記した運命の予言を思い起こし、思わずセエント・ヘレナ島にいるような錯覚を起こしたから。
ロ　短時日のうちに改装工事を行ったためか、以前来たときに比べて薔薇色の壁の色の調和が一新していたから。
ハ　昼間から夕刻にいたる太陽光線の変化によって、壁と椅子とテエブルの色が、以前とは異なって見えたから。
ニ　何ものかの敵意から避難したはずなのに、巻煙草の煙や肖像画によって恐ろしい記憶を呼び覚まされたから。
ホ　薔薇色の壁と、マホガニイまがいの椅子やテエブルの調和が保たれていないため、幸福感が増してきたから。
ヘ　カッフェの店員の勘違いにより、銀貨と銅貨を間違えられ、すぐに勘定を済ませることができなかったから。

問十八　乙の文章における傍線部3に、「家の焼くるを見て、うちうなづきて、時々わらひけり」とあるが、良秀はなぜ家が焼けるのを見て笑ったのか。その説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　これまで見たことのないような炎を見て、新しい境地を発見した喜びと、高みに達したという満足感を得たから。
ロ　車に閉じ込められ焼き殺された娘の苦しみを思い合わせ、安閑として生きながらえない自らの運命を悟ったから。
ハ　火事見舞にかけつけた者たちに妻子を焼き殺したことを告白したことによって、自責の念がより強くなったから。
ニ　怨霊にとりつかれ、意識せずに火を付けてしまったことにより、あらゆる罪悪感が喜びに変わってしまったから。
ホ　どうしても描けなかった不動尊の火炎を表現できたことにより、家などは今後何軒でも建てられると思ったから。
ヘ　人面獣心と非難されながら絵を描き続けてきたものの、唯一の拠り所であった妻子を失ったことに気付いたから。

問十九　乙の文章における傍線部4・5の「物」の意味として、最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　動作　　ロ　楽器　　ハ　財産　　ニ　言葉　　ホ　悪霊　　ヘ　食物

問二十　乙の文章に用いられている敬意を表す活用語をすべて取り出し、敬語の種類と活用形を確認した上で、その組み合わせが本文にみえるものを次の中から二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　尊敬・未然形　　ロ　尊敬・連用形　　ハ　尊敬・終止形
ニ　謙譲・連体形　　ホ　謙譲・已然形　　ヘ　謙譲・命令形

問二十一　丙の文章における傍線部6「古之人天而不人」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　素行が悪く劣ったいにしえの人は、天に届くかのような存在を人として認めることができなかった。
ロ　理想とすべきすぐれたいにしえの人は、天のような自然な存在であって人為的な存在ではなかった。
ハ　いにしえの聖人に反対した人は、武力を恃むばかりで、天然自然の大きな存在をかえりみなかった。
ニ　理想とすべきいにしえの聖人は、必然は必然として考え、武力に訴えることも辞することはなかった。
ホ　いにしえの悪人は、ある時は道に背くため、かえって天について語ることをせず自然にふるまった。
ヘ　道を知ることのできるいにしえの人は、自然の存在を認めるため、言葉に出すことができなかった。

問二十二　丙の文章における空欄 Ⅳ に入る語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　必　　ロ　兵　　ハ　書　　ニ　巧　　ホ　金　　ヘ　楽

問二十三　丙の文章の出典である、『荘子』の思想を端的に示す語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　格物致知　　ロ　経世済民　　ハ　諸行無常　　ニ　性悪説　　ホ　性善説　　ヘ　万物斉同

問二十四　甲A～C・乙・丙の文章の、いずれかの内容と合致するものを次の中から二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　芥川龍之介は、『荘子』（文中では『韓非子』）の「屠龍」の語に、自分の名前に含まれる龍を屠るという寓意を感じたので、死への恐れを克服するために地獄を描く作品を次々と執筆した。
ロ　芥川龍之介は、『侏儒の言葉』において、人生の苦しみに比べれば地獄はたいした存在ではなく、住み慣れれば特別な苦しみなど感じなくなってしまうだろうと説いた。
ハ　『地獄変』において、横川の僧都様は数少ない良秀の庇護者であり、完成した地獄絵の屏風を見てあまりの出来の良さに感動したため、大殿様に笑われてしまった。
ニ　芥川龍之介は、『宇治拾遺物語』を換骨奪胎して、『地獄変』を芸術至上主義的な作品に昇華し、自死した良秀を炎熱地獄から極楽に往生した人物とした。
ホ　荘子は、道を知ることは容易であるが、口に出さずにいることは困難であり、知っていて言わないのは、人の道にはずれることだと論じた。
ヘ　荘子は、凡俗の者は必然でないものを必然として行動するから武力が必要となり、結果として破滅に至ることになると論じた。

〔以　下　余　白〕

〈2016 H28102023〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意） 所定の欄以外に番号・氏名を書いてはならない。

（採点欄）

（一） 問二

（一） 問六

（二） 問十二

（二） 問十四

〈2016 H28102023〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意） 所定の欄以外に番号・氏名を書いてはならない。

国語（記述解答用紙）

（一） 問二

（一） 問六

（二） 問十二

（二） 問十四

1

2